起源探訪

VOL. 02

社内報

明治期に一大ブームあり
企業の大規模化と近代化が背景にあった

国内社内報の第1号『兵庫の汽笛』

明治30年代後半、紡績業を中心に社内報が花盛りとなった。ベンチャーブームで乱立した紡績会社が合併・買収で巨大化し、近代的な経営が模索され始めた時期である。現場の意識を１つにまとめ、トップの意思を末端まで伝える手段の１つが、社内報だった。

国内社内報の第１号は明治36年６月、鐘淵紡績会社（以後、鐘紡：現クラシエホールディングス）兵庫支店で発行された『兵庫の汽笛』である。紡績はその動力に蒸気を使い、その汽笛は始業や終業、休憩などの合図にもなっていたことからその名が付いたようだ。実物はタブロイド判で、漢字すべてにルビがふられている。

発案者は、温情主義経営で鐘紡を一流企業に育て上げ、後に名経営者と謳われた武藤山治氏だ。当時、全社支配人だった武藤氏は海外雑誌記事を読み、3000人の職工を抱える米キャッシング・レジスター社が、「何人といえども会社に働くものは一心同体の仕組みとし皆その意見を尽くさしむるため」社内報や注意箱の制度を巧みに利用していることを知る。「これだ！」と膝を打った武藤氏は、直ちにそれらを鐘紡にも導入した。

武藤氏は手始めに、兵庫支店内で配る『兵庫の汽笛』を発行。その効果を認めると、３号目からは『鐘紡の汽笛』と改題し、毎月２回、全社員とその家族、職工を募集していた地域の役場に配ったという。よほど社内報が気に入ったのか、翌年には女性従業員を対象にした『女子の友』まで作ってしまう。その後、鐘紡に続けとばかり、各社が続々と社内報を発行したところを見ると、社内報の効果は予想以上に大きかった、と思われる。

ところで、一方の注意箱である。こちらはいわゆる提案制度の走りだが、社内報ほどうまくはいかなかった。上司が意見具申を邪魔したり、嫌な顔でもしたりしようものなら「いかなる高い地位の者でも直ちに懲罰解雇する」とまで宣言したが、投書はなかなか集まらなかった。職工たちにしてみれば、会社の発展うんぬんよりも、目先の健康や生活のほうが大事だったのだろう。

名経営者となった武藤氏は後に、著書『私の身の上話』でこう書いている。「注意箱と言ひ雑誌と言ひ、今日では多数の使用人や職工を使ふところでは、大抵のところで行はれて居りますが、其効果の如何は運用の如何に依つて定まるもので、統率者の努力に依るものであると知つて置かねばなりません」

Text = 曲沼美恵

フリーライター。1970年生まれ。福島大学教育学部卒業。日本経済新聞社を経て、現在に至る。著書『ニート――フリーターでもなく失業者でもなく』（玄田有史氏との共著、幻冬舎）

Illustration = 下谷二助

参考文献

『鐘紡百年史』、『恐慌を生き抜いた男―評伝・武藤山治』（澤野廣史著、新潮社）、『明治期紡績労働関係史：日本的雇用・労使関係形成への接近』（岡本幸雄著、九州大学出版会）、『日本労務管理史研究：経営家族主義の形成と展開』（間宏著、御茶の水書房）